盛大に闘うメーデー

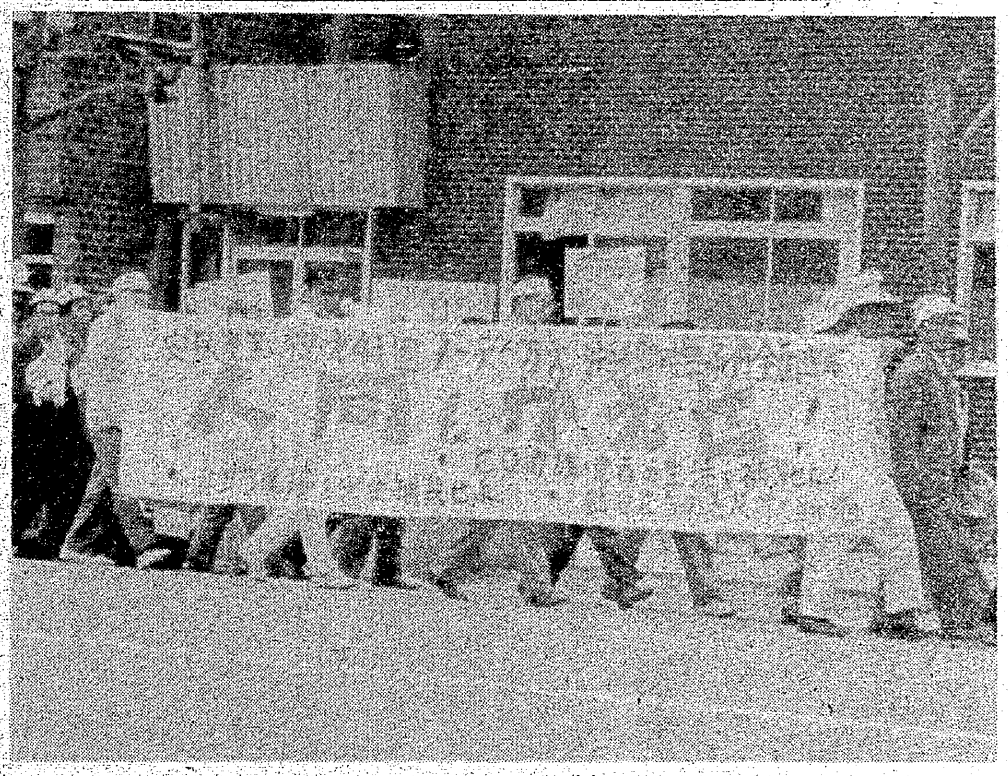
「はたかぜ」に異例の感謝状

第四十二回メーデーは五月晴れの五月一日おこなわれた。大牟田地区では午前十時から笹林公園で約一万人の組合員、家族を結集して大集会のあと市内をデモ行進した。この大集会の中で近く引退する第二代目「はたかぜ」にその闘いの功績をたたえる異例の感謝状がおくられた。

荒尾地区では午前十時から西原グラウンドで組合員、家族を結集してひらかれた。

いずれも安保・物価・公害など闘うメーデーの性格をよくあらわしたプラカードが目立った。なお大地評主催のメーデー文化行事では、五月十二日（日）に囲碁・将棋大会がおこなわれたが、囲碁では団体戦で三池労組三川Cチームが優勝、同じ三川Aチームが三位に入賞した。本因坊戦では四山高木三段が三位に、新人戦では四山久保田二級が優勝、港務平川四級が三位となった。

はたかぜへの感謝状が…



メーデー写真集

人目を集めながら果しなく続くデモ

（ひときわ胸にひびいた「人間をかえせ」の訴え）

（左）七〇年闘争への誓い

湧きあがる労働歌

共闘の旗を先頭に

文化祭には家族ぐるみで

劇の練習もはじまる

詩画展は六、七日の両日

三池労組第一回文化祭は文化サークルによる詩画展が六月六・七日の両日、各指導部出演による演芸会が六月七日に、いずれも大牟田市民会館でひらかれるが、それにむけて各指導部、および美術・書道・文化サークルによる準備は着々とすすめられている。

出品は二十数点

詩画展は美術サークルからは絵が九点、書道サークルからは書が六点、文学サークルからは詩三点、俳句二点、短歌二点などが出品されることになっている。

詩や俳句、短歌はそれぞれの作者が自分で書いて展示するもので絵や書とならんで三池の働く者の意気をあらわす展覧会がつくり上げられるものと期待されている。なお会場は市民会館二階の第一集会室で、時間は六日・七日とも朝九時から夜七時まで、入場は無料。

脚本もできる

各指導部で出演する演劇については、すでに宮浦、港務の両指導部がそれぞれの有志により脚本もできあがり練習に入っている。

宮浦指導部に「炭壁にきざむ歌」、港務指導部は「歴史は裁く」という題がつけられており、公開が期待されている。

なお、他指導部での準備もすすんでいる。

「三千五百万円支払え」

労災賠償裁判に注目の判決

企業で起きた事故により重傷を負った一人の労働者が、昭和四十三年に起こした労災賠償裁判に見ごとな勝訴をおさめ、注目を集めている。

月刊誌〝いのち〟（五月号）によれば、この訴えを起こしたのは横浜の住友重機（事故当時は住友重機と合併前の浦賀重工橋梁工場）に働いていた真志堅清さん（四十才）である。

真志堅さんは昭和四十二年四月二十八日、常石造船所構内で、同造船所が発注した浦賀重工建設の三トン固定式水平引込みクレーンの試運転、運転室にはいり、三トンのバラスト（重荷）を地上から五メートルほど釣りあげたところ常石造船が造ったクレーンの基礎部分がこわれ、そのためクレーンが横倒しになり、このため真志堅さんはその下敷きになり重傷を負った。

そこで「家族を含め損害は大きい」として、同四十三年九月、家族への慰謝料の三百万円を含め、「総額六千九十三万円の損害賠償」を請求した。（横浜地方裁判所）そして今年の四月二十五日、「そのため再起不能になった労働者に対し、三千五百三十四万円を支払え」との判決となったのである。

三千五百三十四万円といえば、請求額からすれば半分に過ぎないとはいえ、この種判例からすれば大きな成果であろう。（同記事の一節から）

ちなみに判決理由を紹介すれば「事故の原因は常石造船の造った基礎部分に欠陥がある。同造船は同部分に鉄筋をいれず、大型の石を多数混入、規格より短いボルトを使ったりしたため、クレーンの固定性に欠け、強度の不足から重さに耐えきれず基礎部分が割れた。……」

と、全面的に真志堅さんの主張が認められたとされている。

なお〝いのち〟の同記事は次のように訴えている。

「もう泣き寝入りはやめよう。正当な権利は守らなければならぬ当然の権利を主張して立ちあがろう」

豆事典（KNA）

ロン・ノル

カンボジアの右翼の頭目。首相兼国防相。五十六才。フランス留学から帰り裁判官、州知事、国警長官をへて軍部入り。六〇年軍総司令官。六三年副首相。六六年首相。王族出のシリク・マタク副首相と結んで中立主義の破壊を策動。彼に支持なく、政権は弱体。

私の書棚

職場新聞活動者は大いに学ぼう

労大ハンドブック「職場の日刊紙活動」

こんど〝労働ハンドブック〟の一つとして、職場の「日刊紙活動」（田村靖著）という本が発刊された。文字通り、職場新聞活動における全国的な経験が集約されています。

現在私たち自身が、職場からの真の統一をめざして、職場新聞活動に乗り出していますとき、この運動の分野で先進的な活動をやっている実態にふれることは、この上もなく助かることです。

参考のためにその内容を紹介しますと、大きく二つに分かれてその第一部が「職場に息づく日刊紙」、第二部が「日刊紙づくりはこうして」となっています。

全逓四国の高松簡易保険支部の「朝刊高松簡保」、全造船長崎造船分会の職場新聞の一つ「てつのひ」、全林野札幌営林局分会の「レンズ」、合化小野田肥料労組の「一日ニュース」、全林野付知分会（名古屋）の「日刊つけのち」、全専売高松工場支部の「全専売高松」、全逓久支部の「日刊日田」……など「これは……」と思う職場新聞活動の経験が一冊に集められています。

そしてそれぞれの活動の経過、編集態度、闘いとの関係などが明らかにされ、それぞれ学ぶところが多いようです。

とまれ職場新聞は、労働者を変え、職場を変え、真の統一を実現してゆく上での根源の力ですから、学ぶところは大いに学んでがんばってゆきましょう。

なお、定価は百二十円で、買うにも手ごろなものです。ぜひ読んでいただくように、お願いします。

お問い合わせは、労大大牟田分校（組合本部内村上）にお願いします。